Strix Vol. 25, pp. 191-195, 2007

シジュウカラの擬傷と思われる行動の観察記録

今仲嶺雄

〒639-0202 奈良県北葛城郡上牧町桜ヶ丘 3丁目11－12

擬傷とは，地上に単独で営巣する鳥にみられる，傷付いたようなしぐさで捕食者の気を引く行動であり，敵を惹きつけ自分が守りたいものから敵を遠ざける，はぐらかしディスプレイの一種である（山岸ほか 2004）．地上で営巣する鳥のほかに，藪に営巣するホオジロ類でも擬傷がみられる場合がある（巌佐ほか 2003）．筆者は，これまでに報告例のないシジュウカラ *Parus major* の擬傷と思われる行動を観察したので，ここに報告する．

2006年 6月20日午前10時29分から30分までの 1分間，奈良県北葛城郡馬見丘陵公園の路上でシジュウカラの擬傷と思われる行動を観察した．この日の天候は晴れ，10時の奈良市の気温は26.8℃，風速 0.8m/s（気象庁の気象統計情報による）であった．観察場所周辺の環境は，道をはさんで一方が竹林，もう一方がキリ *Paulownia tomentosa* や果樹などがある疎林であり，シジュウカラやメジロ *Zosterops japonicus* などがよく観察される場所である．一連の行動については，デジスコ（フィールドスコープとデジタルカメラを組合わせたもの）で記録した．

公園内にて，著者から約10m離れた路上（図 1）にシジュウカラ成鳥 1羽が降り，頭部，背中，腰の羽毛を逆立て，両翼を大きく広げて地面近くまで垂らし，尾羽を扇のように広げて伏せる様な姿勢で，翼と尾を震わせはじめた（図 2－a）．その後，翼を引きずりながら，道の脇にある竹藪に向かって少しずつ前進していった（図 2－b, c, d）．さらに，成鳥の近くに幼鳥 1羽が降り，成鳥と同じく頭部，背中，腰の羽毛を逆立て，両翼と尾翼を広げ，地面に伏せるような姿勢をした（図 3－a）．成鳥は，幼鳥が近くに降りて間もなく飛び去った．幼鳥は前進せず，ほぼ同じ場所でしばらく両翼と尾羽を広げていたが（図 3-b），成鳥が飛び去った後，広げていた翼と尾羽を閉じて羽繕いを行なった（図 3-c, d）．その後，成鳥が入ったのと同じ竹藪の方

図 1．擬傷と思われる行動が観察された地点（写真中×印）と周辺の環境．

Fig. 1. Observation site (×: position of the adult and juvenile Great Tit).

2007年 5月24日 受理

キーワード：シジュウカラ，擬傷

図 2. 擬傷と思われる行動をするシジュウカラの成鳥(a: 10 時29分17秒, b: 10時29分18秒, c・d: 10時29分19秒

Fig. 2. Injury-feigning display of the adult Great Tit. (a: 10:29'17, b: 10:29'18, c・d: 10:29'19)

へ飛び去った. なお, シジュウカラの性別について, 幼鳥はもちろん成鳥も不明であった. また, 観察後に写真で成鳥, 幼鳥ともに口を開けているのを確認したが, 観察時に鳴き声を出していたか否かは不明である.

今回観察されたシジュウカラの行動はこれまで知られていなかったものであり, シジュウカラの行動について比較的よく網羅されているCrampほか(1993)や浦本(1966)においても, 今回と同様の行動は記述されていない. 著者の前方に降りてきて行なったこと, けがをして飛べないようにみえるしぐさであったこと, 近くに幼鳥がいたことから, 観察された成鳥の行動を擬傷行動と推測した. 産卵後に雌がつがい相手の雄に対して行なう求愛給餌の餌ねだり行動は, 2回目繁殖の抱卵中の雌でも観察されることがある(浦本 1966). この場合, 雌は 1回目またはやり直し繁殖の巣立ちビナと一緒になって雄に餌ねだりを行なう. しかし, 雌の餌ねだり行動はCrampほか(1993)によると, 翼を半開きにして震わせるのみであり, ほとんどが樹上で行なわれる. 今回観察されたように地上に降り, 翼を大きく広げて地面近くまで垂らし, 尾羽を扇状に広げる行動はともなわない. また, 尾羽を広げる姿勢はいずれも威嚇や攻撃にかかわるものであり(Crampほか 1993), 餌ねだりの際には尾羽を

図 3. 擬傷と思われる行動をするシジュウカラの幼鳥(a: 10時29分33秒, b: 10時29分48秒, c: 10時30分02秒, d: 10時30分10秒).

Fig. 3. Injury-feigning display of the juvenile Great Tit.(a: 10:29'33, b: 10:29'48, c: 10:30'02, d: 10:30'10)

広げた姿勢をとらない.

一方, 今回観察された行動は蟻浴行動とも類似点が認められる. 蟻浴とは, アリの巣の上にすわってアリを羽毛の間に入り込ませたり, アリをくちばしでつまみ体に擦り付けたりする行動であるが(八杉ほか 1996), 今回観察された伏せるような姿勢は, 黒田(1957)によって紹介されているカケス *Garrulus glandarius* などの蟻浴の際の姿勢とよく似ている. しかし, 蟻浴は通常同じ場所にとどまって行なわれることから, 今回観察された成鳥の少しずつ前進する行動はそれに一致しない. また, 今回の行動中にアリをくちばしでつまむようなしぐさは観察されず, 体にアリが付着しているのも観察されなかった.

以上のことから, 今回観察されたシジュウカラ成鳥の一連の行動は, 求愛給餌の餌ねだりや蟻浴とは考えにくく, 巣立ち後の幼鳥が近くにいる状態で, ヒトが近づいたために引き起こされた擬傷行動であった可能性が高い.

これまで日本のスズメ目鳥類の擬傷行動については, メボソムシクイ *Phylloscopus borealis* (清棲 1966), ヤブサメ *Urosphena squameiceps* (清棲 1966), コジュリン *Emberiza yessoensis* (海老原

1968)，オオジュリン *Emberiza schoeniclus*（中村ほか 1968)，シマアオジ *Emberiza aureola*（中村ほか 1968)，ホオジロ *Emberiza cioides*（山岸 1970)，サンショウクイ *Pericrocotus divaricatus*（岡本 1976)，ノジコ *Emberiza sulphurata*（金子 1979)，クロジ *Emberiza variabilis*（池田・上馬 1982）などで報告があるが，これらのうち巣立ちした幼鳥をつれた状況での擬傷行動が確認されたのは清棲(1966)のヤブサメの事例のみで，ほかはいずれも抱卵中もしくは巣内育雛中の成鳥が行なったものである．したがって，今回のように巣立ち後の幼鳥を連れた家族期の成鳥が擬傷を行なった例が報告されるのは清棲(1966)に続いて 2例目となる．

なお，今回，幼鳥で観察された行動については，親への餌ねだり行動であった可能性も考えられるが，シジュウカラ幼鳥の餌ねだり行動は尾羽を広げず，翼はあまり大きく下げずに震わせるので，今回観察された幼鳥の翼や尾羽の広げ方とは一致しない(著者 個人観察)．観察された幼鳥の行動が，基本的に成鳥で観察された行動と姿勢などがよく一致していたことから，成鳥が行なったのと同様の擬傷行動である可能性が考えられる．しかし，今回の幼鳥による行動が，擬傷に近い行動であったとしても，前進する様子が認められなかったこと，途中から羽繕いに移行したことから，本来の擬傷の役割を十分に果たしていたとは考えにくい．

なお，スズメ目の幼鳥による擬傷行動はこれまで国内からの報告例がなく，今回と類似の報告も知られていないので，今後，類似の例を収集して明らかにしていく必要があるだろう．

最後に，本報作成にあたり，文献検索をはじめ報告全般についてご指導くださった梶田学氏に厚く御礼を申し上げたい．

引用文献

Cramp, S., Perrins, C.M. & Brooks, D.J. eds. 1993. Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa VII. Oxford University Press, Oxford.

海老原龍夫．1968．コジュリンの繁殖について．野鳥 33: 59-62.

池田善英・上馬康生．1982．クロジの営巣-白山山系での初繁殖確認-．はくさん 10(1): 7-9.

巌佐庸・松本忠夫・菊沢喜八郎・日本生態学会(編)．2003．生態学事典．共立出版，東京．

金子与止男．1979．ノジコの生活史．新潟県生物教育研究会誌 14: 33-38.

清棲幸保．1966．野鳥の事典．東京堂出版，東京．

黒田長久．1957．鳥の「蟻浴」について．野鳥 22: 141-144.

中村登流・山岸哲・飯島一良・香川敏明．1968．泥炭地草原におけるホオジロ属の生活場所と行動圏の比較調査．山階鳥類研究所報告 5: 313-336.

岡本秀明．1976．擬傷行動 サンショウクイ．羽田健三(監修)続野鳥の生活: 105-108．築地書館，東京．

浦本昌紀．1966．野鳥の生活．紀伊國屋書店，東京．

山岸哲．1970．ホオジロの繁殖期の生活について．山階鳥類研究所報告 6: 103-130.

山岸哲・森岡弘之・樋口広芳(監修)．2004．鳥類学事典．昭和堂，京都．

八杉龍一・小関治男・古谷雅樹・日高敏隆(編). 1996. 生物学辞典 第4版. 岩波書店, 東京.

The injury-feigning behavior of the Great Tit *Parus major*

Mineo Imanaka
3-11-12 Sakuragaoka Kannmaki-cho, Kitakatsuragi-gun, Nara, 639-0202 Japan

A behavior that seemed to be injury-feigning displays by an adult and a juvenile Great Tit, was observed at the Umami-kyuryo Park, Nara Prefecture on 20 June, 2006. No injury-feigning displays by adult or juvenile Great Tits have been reported in Japan. The adult bird came flying down to the track approximately 10 meters from the observer, where it ruffled the body plumage, expanded its wings wide drooping them to the ground, and opened the tail. Then, the bird hobbled toward the bamboo grove on the side of the track with the tips of the wing touching the ground. At that moment, a juvenile flew down nearby, and showed the same posture for a while by opening its wings and tail as the adult bird had done earlier, but stayed there rather than moving forward. The adult bird flew away soon after the juvenile appeared. The juvenile, after the adult disappeared, closed its wings and tail, and turned to preening. Then, it flew away toward the same bamboo grove. This is possibly considered as an imperfect injury-feigning display. The sexes of the two birds were unknown.

Key words: Great Tit, Parus major, Injury-feigning, distraction